

# 『トム・ジョウズ』における捨て子の処遇 —フィールディングはロンドン捨て子養育院をどう見たか—

圓 月 優 子

ロンドン捨て子養育院（The London Foundling Hospital）が国王からの勅許（Royal Charter）をえて実際に運営を開始したのは1741年である。「捨て子養育院」という名前ではあるが、保護される子どもたちは親によってここへ連れてこられるのだし、将来親が迎えに来る可能性を考慮して、親の名前が記録され親子の目印になるような品を残す決まりがあったことなどからすると、この子どもたちを「捨て子」と呼ぶことが妥当かどうかは疑問である。とは言え、捨て子養育院に保護された子どもの多くは非嫡出子で親が養育の義務を放棄しており、後年また迎えに来るといったケースもほとんど無かったことからすると、「捨て子」という呼び方も不適切ではないのであろう。

親に遺棄される子どもの数が激増する世相のなか、ロンドン捨て子養育院はひとりの篤志家の熱意から出発して設立にこぎつけた慈善施設であるが、その過程で芸術家たち、特に画家や音楽家の積極的な支援が大きな貢献を果たしたことは注目すべきだ。一方、世相の動きに敏感に反応する傾向があったはずの文人たちは、ロンドン捨て子養育院のような施設をどうとらえたのだろうか。

本論ではこのロンドン捨て子養育院設立当時、小説家業と並行して法律家としても活動をしていたヘンリー・フィールディング（Henry Fielding, 1707-1754）に注目し、捨て子に対する彼のスタンスを彼のジャーナリストとしての言説によってまずは確認する。それを踏まえて、彼の代表作である小説『捨て子トム・ジョウズの物語』（*The History of Tom Jones, a Foundling*, 1749）の筋立て、特にこの小説の一見ご都合主義的にみえる大団円の結末の

意味について検証する。

## I. ロンドン捨て子養育院の設立

ロンドン捨て子養育院はトーマス・コーラム (Thomas Coram, 1668-1751) の尽力によって設立された。コーラムは、元は造船業ならびに北アメリカとの貿易に携わっていた人物である。ロンドンの街頭で死んでしまった、あるいは死にゆくままに放置された子どもたちの哀れな姿を見て心を痛めたコーラムは、このような子どもたちのための施設の設立に自分の後半生を費やすことを決心する。彼の意図はあくまで人道主義的なものであったが、それを実効力のある形にするにあたって、コーラムは非常に有能であったといえるだろう。捨て子のための収容施設の設立を実現するためには、当然かなりの資金が必要となり、コーラムひとりでそれをまかなうことは不可能であった。そこで彼が考えたのは、この施設の意義を積極的に宣伝し、国王から勅許状を獲得することで施設の必要性を公的に認定してもらい、出資者を募って株式会社の慈善事業を興すことであった。

コーラムの企図が社会から認められた背景には、それが時代の要求に二つの点で合致していたことがあるだろう。ひとつは、啓蒙主義精神の影響を受けた慈善活動に対する社会全体の関心の高まりである。イギリスでは古くからさまざまな結社が設立されてきたが、特に近代に入って以降の慈善を目的にした結社・協会の発展にはめざましいものがある。自由放任主義をひとつの特徴とする国にあっては、国家主導で福祉政策に取り組むには時間がかかり、博愛主義志向の国民性がその不足を補完する傾向にあったといえるだろう。社会的弱者、たとえば未婚の母の非道徳性を懲罰の対象とみなすよりは、無責任な男性や悲惨な環境の犠牲になったものとして憐れむ傾向が少しずつ生まれてきた。子どもは子どもとして扱われるべき存在であるとして、子ども期の教育の重要性を説くジョン・ロック (John Locke, 1632-1704) の思想なども浸透しつつあった時代である。

時代の特徴としてあげるべきもうひとつの点は、人口減少に対するおそれ

である。十八世紀には産業化が進み帝国が拡大する動きのなかで、国家の商業的・軍事的発展のためには人口の確保・増加こそが必須要件であると考えられていた。死亡率がまだまだ非常に高いなか、国の繁栄のためには、一定の訓練を受けた健康な人材の確保が不可欠とみなされたのである。人口の減少は実際には必ずしも十分な根拠のある傾向ではなかったようだが、それに対する漠然とした焦燥によってこそ、街頭に捨て置かれる子どもの命を救い国家の有用な人的資源として役立てるというコーラムの計画に、大きな意義が見出されたのである<sup>1</sup>。

コーラムの熱意が功を奏し、この計画に理解を示して出資を申し出る人々が集まった。そのなかには貴族も多く含まれ、国王からの勅許状の獲得にもつながっていった。それと同時に特記すべきは芸術家たちの協力である。画家のウィリアム・ホガース (William Hogarth, 1697-1764) は、養育院の理事のひとりとしてこの組織の運営にさまざまな形で関わっている。養育院の紋章や収容される子どもたちの制服をデザインすることから始まって、自分が描いたコーラムの肖像画などいくつかの作品を養育院に寄付すると同時に、フランシス・ハイマン (Francis Hayman, 1708-1776) やトマス・ハドソン (Thomas Hudson, 1701-1779)、国王の首席宮廷画家であったアラン・ラムゼー (Allan Ramsay, 1713-1784) など、他の画家にも協力を呼びかけた。こういった画家たちの絵が捨て子養育院に展示されることで、一般の人たちが絵の鑑賞のために捨て子養育院に足を運ぶこととなり、養育院の大きな宣伝効果となったのだ。捨て子養育院での絵画の展示は、イギリスにおける初めての公開美術ギャラリーとみなせるもので、この養育院での画家たちの集まりがもとになって、のちに王立美術院が設立されることにも繋がったといわれる<sup>2</sup>。作曲家のヘンデルも捨て子養育院の支援者として、養育院で定期的に「メサイア」などのコンサートを開くことで大きな収益をあげ、養育院に多大な寄付をした。当時、外国からの芸術の輸入が盛んだったなか、養育院は国内の芸術家たちの存在感を強調するてだてもなった。このように洗練された芸術が人目を引くことによって、ともすれば蔑視の対象ともなりかねない捨て子養育院自体のイメージ改善に役立ったのである<sup>3</sup>。

## II. 小説家と捨て子

ロンドン捨て子養育院は芸術家たちから多大なサポートを受けたわけだが、「芸術家」といっても、文人たちの姿が前面に出てくることはない。ホガースのような画家たちは絵画が展示できるし、ヘンデルのような音楽家はコンサートを開くことにより、一般市民を惹きつけて寄付を募る好機を作り出すことが容易にできたわけだが、たとえば小説家などにとっては、そのような形で一般市民にその場で直接アピールする作品の提供やパフォーマンスはしにくかったということも一因かもしれない。

その一方で、十八世紀のイギリスの小説・演劇には、捨て子（あるいは非嫡出子）を扱ったものが数多いことは注目に値する。たとえばダニエル・デフォー（Daniel Defoe, 1660-1731）の『モル・フランダーズ』（*Moll Flanders*, 1722）、リチャード・スティール（Richard Steele, 1672-1729）の劇『気配りの恋人たち』（*The Conscious Lovers*, 1723）、ヘンリー・フィールディングの『トム・ジョウンズ』、トバイアス・スモレット（Tobias Smollett, 1721-71）の『ペリグリン・ピクル』（*Peregrine Pickle*, 1751）、『ハンフリー・クリンカー』（*Humphry Clinker*, 1771）、ファニー・バーニー（Fanny Burney, 1752-1840）の『エヴェリーナ』（*Evelina*, 1778）など、枚挙にいとまがない。これは実際にこの時代のイギリス社会における非嫡出子の急増を反映した現象と言えるだろう。十八世紀以前において、非嫡出子は一般にネガティブな存在ととらえられていた。しかし実際に非嫡出子が急増する状況のなか、批評家マキオン（Michael McKeon）も指摘するところだが、社会は次第に非嫡出子の存在を許容する（許容せざるをえない）方向に変化していったようだ<sup>4</sup>。その変化は文学において、わかりやすい形であらわれている。つまり単に非嫡出子あるいは出自の怪しいものがキャラクターのひとりとして登場するというにとどまらず、時にはある種ヒーローとしての魅力を示す形でクローズアップされるといった形である。彼らが恵まれない環境に育ち、苦難を克服して（あるいは巧妙にすり抜けて）活路を見出していく姿、その生命力に、

読者は喝采をおくったのである。

理念の点では非嫡出子に対して寛容になり、捨て子を登場させる小説も多くあったというのに、当時注目された捨て子養育院自体が小説の中にとりあげられることがほとんどなかったということに関して、批評家リサ・ザンシャイン (Lisa Zunshine) の考察は興味深い。彼女によると、当時の作家たちがロンドン捨て子養育院で育った子どもを積極的に描こうとしなかった理由は、両立し得ない二つの理想に関わるという。時代全体としては自由を希求する風潮がある一方、ロンドン捨て子養育院で育つ子どもたちについては、自由を希求し享受するより先に、社会に対して全うな責任を果たすことが期待され、そのために厳しい管理・統制のもとで育てられることを社会が求める現実があったというのである。実際、ロンドン捨て子養育院の理事たちや後援者たちは、子どもたちが悪の道に染まらぬよう、閉鎖的な環境で自由を制御しながら子どもを養育するイメージを強調していた。その点が、個人の自由な価値観や新規なものを模索する精神を是とする十八世紀の小説家たち向きではなかったというのである。作家の中にも、そしてもちろん当時の読者の中にも、ロンドン捨て子養育院に金銭的援助をおこなっていたものがおり、フィクションの登場人物とは言え、捨て子養育院出身者が自由奔放に、好き勝手に世の中を渡っていく姿というのは、違和感を抱かずにはおれなかったのだろうというザンシャインの考えには説得力がある<sup>5</sup>。

フィクションの作中人物に捨て子を設定するということは多々みられても、捨て子養育院そのものに対して文人たちがどのように関心を寄せたかは、いまひとつはっきりしない。たとえばダニエル・デフォーのように、子殺しが多発する現状を嘆き、哀れな子どもたちを救済して国にとって有用な存在になるよう育てるための養育院の必要性を熱弁する作家がいる一方で<sup>6</sup>、サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709-1784) はロンドン捨て子養育院の存在意義を否定するわけではないが、肉体の健康面への配慮に比べ、精神的・宗教的な側面での養育が不十分であるとして、養育院の運営実態について疑義を呈している<sup>7</sup>。彼らはジャーナリストでもあったため、その観点から捨て子養育院についての観察を残したのであろう。この点、同じくジャーナリストであり後年は治安判事として現実社会の諸相に直面し、かつ

小説家としても捨て子を主人公とした『トム・ジョウンズ』を書いたヘンリー・フィールディングの場合は、捨て子養育院をどのようにとらえたのだろうか。

### Ⅲ. フィールディングと捨て子養育院

ロンドン捨て子養育院が国王ジョージ2世 (King George II, 1683-1760) から勅許状を受けたのは1739年10月17日であったが、この前後の時期はフィールディングの人生にとっても大きな転換期であった。もともと人気劇作家として名を馳せた彼は、1737年6月に演劇検閲令が公布されたのを機に劇作から手を引き、同年11月に心機一転、中央法学院 (Middle Temple) に入って法律家としての勉強を始める。順調に研鑽を重ねて1740年には正式に法律家として登録をし、その後1748年にはウェストミンスター治安判事、翌49年には管轄区域を広げてミドルセックス治安判事に昇格する。法律の仕事に携わるのと並行して、ジャーナル類や小説の執筆も手掛けるようになる。劇作家時代から既に社会風刺を得意としていたフィールディングだが、治安判事の立場でさまざまな社会のありようを観察し、それに関してジャーナリストとしても積極的に発信し、さらにそれを踏まえた小説世界を構築するという道筋が、1737年～40年ごろから始まるのである。

ジャーナリストとしての言説をみると、フィールディングは慈善、特に捨て子のための慈善に関してその重要性を主張し続けていることがわかる。たとえば、自らが1739年11月から編集を開始した『チャンピオン』紙 (*The Champion*) のなかで、「当世のすばらしい特徴は慈善である」<sup>8</sup>と主張し、「略奪やら搾取、強要などによって得られた、たいていの首相や金貸し業者、質屋、株式仲買人、下級官吏などに関わる財産はすべて、この [慈善の] 用途にあてられるべきである」<sup>9</sup>と述べている。社会的弱者を不当に搾取する連中の筆頭に首相をも混ぜ込んで非難するところがいかにもフィールディングらしい。さらに、慈善施設を設立するというのは輝かしい徳であるとして特に三つの施設の名をあげているのだが、そこにセント・ジョージ病院 (St.

George's Hospital) とバース総合病院 (the General Hospital at Bath) に並んでロンドン捨て子養育院が含まれている<sup>10</sup>。それから約10年を経て編集した『コヴェント・ガーデン・ジャーナル』紙 (*The Covent-Garden Journal*) においても、「慈善の心を持たない輩はキリスト教徒の名にもとる」<sup>11</sup>、「今の時代、慈善はこの国のまさに特徴となるものだ」<sup>12</sup>と述べ、当世の素晴らしい慈善施設として二つあげているのだが、そのうちのひとつはやはり捨て子のための施設なのである<sup>13</sup>。

ロンドン捨て子養育院の初代院長を務めたのはフィールディングのパトロンのひとりであったベッドフォード公爵 (John Russell, 4<sup>th</sup> Duke of Bedford, 1710-1771) であったし、理事として精力的に養育院の支援を続けた画家のホガースや作曲家ヘンデルは、フィールディングが小説を含むさまざまな書き物のなかで常々高く評価していた芸術家であった<sup>14</sup>。とすればフィールディングもまた彼らとともに、この施設に対して当然積極的な貢献をしたのかと思われるところだが、彼がロンドン捨て子養育院に寄付をしたという記録はない。前述したように自らが編集するジャーナルのなかで養育院の意義を賞賛したのが関の山だったようで、決して裕福ではない法律家・文筆家であってみれば、それ以上の協力は難しかったのかもしれない。

そもそもフィールディングは、慈善活動を高く評価しながらも、その一方で慈善活動の実際の進め方についてはかなり慎重なところもある。慈善の実行の仕方に問題はないかと常に疑問を投げかけるのだ。

我々個人がおこなう寄付は、我々自身の判断により、大体において最もふさわしい対象に向けられているのだろうか。虚栄心や気まぐれや偏愛によって、あまりにしばしば我々の財布のひもを解いてはいないだろうか。時にはそれが流行だから、またしつこく懇請されることに抵抗しきれず、寄付をしたりしていないだろうか。我々の慈善が、浪費であるとか愚挙であるとかと言われることがないだろうか。いやそれどころか、慈善がしばしば墮落し、怠惰で自墮落な人間を増やし奨励することに明らかにつながってはいないだろうか<sup>15</sup>。

フィールディングは、困窮状態にあるものを十把一絡げに慈善の対象とするような寛容をよしとはしない。法律家やジャーナリストとしての冷徹な判断力をみせて慈善の対象となるべきものをしっかり選別し、働けるはずなのに働く意欲がないせいで困窮しているものに施しは無用という明確な姿勢を示しているのだ。「最も慈善の対象としてふさわしいと私が考えるのは、そこいらの通りで出会うような輩では絶対でない。そういった物乞いの連中は、救済よりも処罰こそがふさわしい」<sup>16</sup>、あるいは「野卑な物乞いにお金を与える——この種の助成金は社会に対する犯罪であり、害毒の存続と促進を手助けすることである」<sup>17</sup>といった具合に手厳しい。社会的弱者に落ちぶれた怠け者に対してフィールディングがみせる容赦なく厳しい姿勢は、彼が執筆した論説のいたるところに見いだせるものなのだ。フィールディングにとって真の弱者とは、「病気や身体障害の人、高齢者あるいは幼児」<sup>18</sup>などである。彼がロンドン捨て子養育院を尊重するのは、幼児は無条件で庇護の対象となってしかるべき存在だからだ。しかもなお、ロンドン捨て子養育院に対してフィールディングの働きかけがいまひとつ物足りなく思える理由は、単に寄付をすることがままならぬ懐具合の問題、あるいは慈善に対する過度に慎重な態度のせいだけなのだろうか。小説家としてのフィールディングは、自分の代表作の主人公トム・ジョウンズを、捨て子としてどのように扱っているのだろうか。

#### IV. 『トム・ジョウンズ』におけるオールワージーの慈善精神

『トム・ジョウンズ』において、捨て子養育院への言及がみられるのは一カ所だけだ。ミラー夫人の娘ナンシーが、未婚のまま妊娠したことについて、「彼女はちょっと空腹だったようで、食前の感謝の祈りを唱える前に夕食の卓についてしまい、その結果、捨て子養育院行きの子どもができてしまった」(XIV, vi, 761)と説明されているところである。これは慈善事業を時事的な話題のひとつとして挿入している程度のことといえそうだが、なによりこの小説のタイトルはもう少し正確に言うと『捨て子トム・ジョウンズ

の物語』であり、主人公トムが「捨て子」という設定であることに加えて、トム以外にも親が正式な結婚を経ることなく生まれた子どもがたくさん登場することに注目したい。ブライフィル少年、モリー・シーグリムの子ども、ナンシー・ミラー、ナンシー・ミラーの子どもなどである<sup>19</sup>。ウェスタン家の食卓で、副牧師サプルがモリー・シーグリムの妊娠の話をニュースとして持ち出した際、ウェスタンは「若い女が私生児を生むというだけの話か」と興味を示さず、それを受けてサプルも「確かにありきたりのことではありますけどね」(IV. x. 189)と言い、はたまたソファイア付きのメイドであるオナーが自分の素性について「私の父と母は結婚しておりましたわ」(IV. xiv. 205)と誇らしげに言うことをみても、この小説もまた、十八世紀になってイギリスにおける非嫡出子の数が急増したとされる社会背景を如実に反映していることがわかる。

また主要登場人物のなかに、その存在自体が慈善を具現化したと言えそうなキャラクターがいることも見過ごすわけにはいかない。捨て子と目される赤ん坊がオールワージのベッドに寝かされているのが発見された際、女中頭のデボラ・ウィルキンズ夫人はこの子どもを早急にどこかへ厄介払いしようと提案するのだが、オールワージは自邸であるパラダイス・ホールにとどめ置くことを宣言する。それはあくまで人道主義的な慈愛の精神からの決断であり、捨て子にとってはこの邸宅以上に整った生育環境は望むべくもなく、まさしくパラダイスであったはずだ。ホガースが描いたコーラム船長の絵姿と重なるようなオールワージのガーディアン的なはからいのもと、トムはパラダイス・ホールという名の慈善施設に収容されるのである。

オールワージの慈善精神を分析すると、そこにはジョン・ティロットソン(John Tillotson, 1630-1694)やアイザック・バロウ(Isaac Barrow, 1630-1677)の影響がみられよう。両者ともイギリス国教会広教会派の指導者であり、フィールディングがおおいに傾倒していた宗教上の支柱である。トムを自分の甥と一緒に育てようとするオールワージと、その判断に異を唱えるブライフィル大尉のあいだの論争は、広教会派とメソジストのあいだの論争とも読める。ブライフィル大尉は罪の結実である非嫡出子を保護することは罪を奨励することに匹敵する、非嫡出子は親の罪のゆえに罰せられてしかるべきな

のだと主張する。

法律は卑しい生まれの子どもを破滅させることを積極的に認めてはいないにしても、この子どもたちのことを親なし子ととらえたし、教会もそのようにとらえて、せいぜいその子たちは国の最下層で最も卑しい職につくよう育てられるべきだと考えたのです (II. ii. 79)。

それに対してオールワージは、「親にどれほどの罪があろうとも、その子どもには絶対に罪はないのだ」(II. ii. 80)と、寛容な姿勢をみせる。オールワージのさらに直接的なモデルとしては、ラルフ・アレン (Ralph Allen, 1693-1764) の名をあげることも可能だ。アレンはフィールディングの寛大なパトロンの一人であり、慈善家としてバース総合病院やセント・バーソロミュー病院 (St. Bartholomew's Hospital in London) の設立に多大な貢献をしたことで知られる人物である。オールワージについては、「貧しい人たち、すなわち働くよりもむしろ物乞いをしようとする者たちに対して慈悲深く…非常に裕福に生涯を終え、慈善施設をひとつ設立した」(I. iii. 38)と記されており、慈善精神がオールワージとアレンを結ぶキーワードとなっている。

## V. パラダイス・ホールと捨て子養育院

捨て子が保護される場所として、パラダイス・ホールを(かなり上等な)捨て子養育院になぞらえることができるだろう。捨て子にとって衣食住の点で非常に恵まれた環境であったことは間違いない。しかし実はこのオールワージの邸宅は、別な側面においても捨て子養育院的である。つまりここはトムにとって手厚く保護されて成長できる環境であるとみえながら、実は厳格な抑圧にさらされる場でもあったのだ。トムにとっての第一の壁は二人の家庭教師、スワッカムとスクウェアである。この二人は常に意見が食い違い対立を繰り返すのだが、それぞれのやり方で、トムを理不尽に抑圧して厳しく責め立て続ける。歴史家ルース・マクラア (Ruth McClure) によると、ロ

ンドン捨て子養育院は「全体的にはスパルタ式で厳しく統制され監視された生活」で、その「持続する監視は、子どもたちを“不適切な人々”との接触から隔離するというガバナーたちの願望からくるものであった」<sup>20</sup>という。ロンドン捨て子養育院の理事たちが制定した養育院運営規則には、ここに勤める監督者の要件について次のような記載がある。「彼は欠点のない人格者で、あまり高齢ではなく、家族を持たないものであるべきだ。彼は常に養育院に居住し、子どもたちのふるまいを、仕事や学習の時も、遊びや食事の時も、厳しく監督しなければならない」<sup>21</sup>。ここに記された監督者像は、「欠点のない人格者」ということ以外はスワッカムやスクウェアにそのまま当てはまるものである。また運営規則には次のような記載もある。

子どもたちは日曜日には常に教会で礼拝に出席すること、そして子どもたちが謙遜と後援者に対する感謝の道義を早く吸収し、非常に奴隷的で骨の折れる仕事にも満足して耐えることができるように、自分たちの身分が低いことを養育院の役員らがしばしば思い出させてやること。というのは、この子どもたちに罪はないが、彼らは親に見捨てられたり遺棄されたりしたのであるから、最低の身分を甘受すべきであり、人道と美德によって子どもを手元に留め、労働によって彼らを育てる親がいるような子どもたちと彼らを、同じレベルに置くようなやり方で教育されるべきではないのである<sup>22</sup>。

この記載は、先に引用したブライフィル大尉の、親なし子は親のある子と同等ではなく、せいぜい国の最下層で最も卑しい職につくよう育てられるべきだという考え方と軌を一にしている。

スワッカムとスクウェアよりもさらに陰険なのはブライフィル少年である。子どもの頃からトムを敵対視し、大人がいない場面ではトムのことを「こじきの私生児」(III, iv, 130)と呼んであげつらうブライフィル少年は、二人の家庭教師を巧妙にあやつる術を身につけて、自分の手を汚すことなくトムを迫害するのである。偏狭な二人の家庭教師だけでなく、オールワージさえブライフィル少年の偽りの言葉に惑わされ、結局はトムを追放することに

なってしまうのだ。

ブライフィル少年ごときの奸計に引っかかってしまうオールワージもオールワージである。慈悲を体現するオールワージであるが、その彼がトムという少年を見誤るといふ点に彼の、パラダイス・ホールの、あるいは慈悲の限界があると言わざるを得ない。この点で善意の人オールワージの人物造形は、決して紋切り型のものではないのだ。オールワージの寛大さが適切な判断力を欠く例としては、彼がスワッカムとスクウェアを庇護し、この兩人に問題があることをある程度察知しながらも子どもたちの教育係にし続けていることがあげられる。またパートリッジやブラック・ジョージに対する処罰の仕方も同様で、治安判事でありながら、オールワージの判断はしばしば妥当性を欠いている。彼と常に対照的に描かれる粗暴で無思慮なウェスタンが、時に非常に鋭い動物的な勘で真実を言い当てるのに比べると、深い洞察力を備えているはずのオールワージが、肝心なところで致命的な間違いをしてしまうことを見過ごすべきではないだろう。

先に引用したが、オールワージの寛大さを描写する際に、彼は「働くよりもむしろ物乞いをしようとする者たちに対して慈悲深い」とあった。これについて批判的なブライフィル大尉は「我々はつけこまれて、値打ちのない者に対して最上級の恩恵を与えてしまう可能性があるのです」(II. v. 94)と反論している。ブライフィル大尉の考え方は狭量でメソジスト的であるが、フィールディング自身の考えはこの点ではむしろブライフィル大尉寄りであったかもしれない。既に述べたようにフィールディングは、働けるはずなのに働く意欲がないせいで困窮している物乞いの連中は、救済よりも処罰こそがふさわしいという、厳しい考え方を示していたからである。

主人公に対していわば敵役ともいえる立場にたつブライフィル大尉の考えに、作者フィールディングの考えと重なる部分があるのは興味深い。同じような現象はブライフィル大尉の息子であるブライフィル少年についても観察できる。トム、ブライフィル少年、ソファイアの三人が関わる小鳥のエピソードに注目しよう。三人がまだ子どものころの話だが、トムは自分で捕まえ育てた小鳥をソファイアに贈る。ソファイアはトムと名付けたその小鳥の足に細い紐を結びつけ、決して自由には飛び立たないようにして大事に可愛

がっていた。ところが意地悪少年ブライフィルは、その紐をほどいて小鳥を空中に放してしまい、小鳥は哀れにもあつという間に鷹の餌食になってしまうのだ。オールワージに事の次第を尋ねられたブライフィルはその小鳥について次のよう弁明する。

その哀れな生き物が自由にあこがれていると考え、それが欲しているものを与えてやらずにはおれなかったのです。何物にせよ、閉じ込めておくというのはとても残忍なことだと、僕はいつも考えていました。そんなことは自然の法則に反することだと僕には思われたのです。自然の法則によれば、あらゆるものが自由である権利を持つのですから。(IV. iv. 160)

ブライフィル少年の性格を良く示す詭弁であることは明らかだ。しかしこの彼の言葉には一定の道理がある。結果として小鳥は鷹の餌食になってしまったが、それでも一生のあいだ足に紐を結びつけられ、自由に飛ぶことができずにいる小鳥の姿はいかにも不自然で哀れである。ブライフィル大佐やその息子ブライフィルといった敵役の言葉に盛り込まれた一種の真理は、パラダイス・ホールを中心とした安全な囲いの世界のモラルを揺さぶるのである。

パラダイス・ホールにおいて明らかにトムに敵対するのは二人の家庭教師とブライフィル大佐およびその息子ブライフィルであるが、トムが本当に乗り越えねばならなかった存在はむしろオールワージであったのかもしれない。成り行きとしてはトムがパラダイス・ホールから追放されるということではあるけれど、パラダイス・ホールはトムにとって本当のパラダイスではなく、その枠の外へ出ることが彼の人生にとっての必然であったのだ。鷹の餌食になる危険性はあるながらも広い世界に飛び立って、経験を重ねることによってこそ、トムは真の成長を遂げることになる。パラダイス・ホールの位置づけ方およびパラダイス・ホールの枠内に留まりえない存在としてのトムの造形の背後には、捨て子養育院的な施設の“善意”の庇護の価値は一定程度認めながらも、ガーディアン的なものに対する作者の払拭しきれない不信感と自由の可能性の希求が見え隠れするのである。

## VI. パラダイス・ホールへ戻るトム

パラダイス・ホールの庇護の外へ出たトムにはさまざまな陥穽が待ち受けている。そこで描かれるのは、軽率な失敗もあり誘惑に屈することもありながら、着実に経験を肥やしとして成長していくトムの姿である。捨て子という恵まれない出自を乗り越えて、片寄りなく豊かな人間性を備え、明るい将来を期待させる若者像を示す主人公であれば、教養小説的にそこで物語が終わることもあり得たはずだ。ところが最後の最後になって、トムの正体はオールワージの甥であることが判明し、パラダイス・ホールの正当な継承者と目されることになるのだ。つまり『捨て子トム・ジョウンズの物語』は、実は捨て子の主人公が捨て子ではなかったことが判明する物語なのである。この展開は何を意味するのだろうか。

批評家H.O.ブラウンは、たとえトムの出自が良い血統のものであることが判明したからといって彼が非嫡出子であることは変わらず、イギリスの法のもとでは厳密に言うとトムに正当な相続権が生じることはないはずだと述べている<sup>23</sup>。さらに批評家ポール・ハンターは、トムのことを単に旧来の血縁上の資格を備えた後継者というのではなく、「道徳的な資格の点で正当な後継者」とし、パラダイス・ホールに新たな秩序、新たな文化をもたらす可能性を示唆するものと位置づけている<sup>24</sup>。つまりトムのパラダイス・ホール相続は、正当な嫡子としての成り行きではなく、彼がそれにふさわしい人格をそなえたからこそのものであり、ここに新しい後継者像が確立したとの解釈が可能なのだ。

しかしそれでもなお、パラダイス・ホールの後継者たるトムはオールワージと全く無縁の捨て子であるわけにはいかなかったのだ。トムの正体が自分の甥であることが判明したとき、オールワージはトムに対する自分の過去の仕打ちを後悔して次のように述べている。「彼に対して私が過去におこったことを本当に恥ずかしく思う。でも私は彼の血統 [Birth] にも徳 [Merit] にも気づいていなかったのだ」。(XVIII. ix. 954) オールワージ自身は、ここ

でもまだ血統を徳と同等に並ぶ重要な要素として認識しているようだ。トムが徳を備えた青年となったというだけでは実は十分ではなく、身元の怪しからぬ母と父を持ち、オールワージの血筋をひくものであることが判明したことによって、トムはパラダイス・ホールの正当な継承者と目されることになるのである。トムの「捨て子性」が解消されるという結末によってこそ、オールワージのみならず一般読者の共感を得て物語に予定調和的な大団円がもたらされているのだ。

## Ⅶ. 捨て子の解消をめざして

『トム・ジョウンズ』という小説には主人公の「捨て子性」解消の展開がみられることについて考察したが、捨て子に対する治安判事フィールディングのスタンスを今一度検証してみよう。慈善施設設立をフィールディングが継続的に評価している証拠として、出版年月に10年の開きがある『チャンピオン』紙と『コヴェント・ガーデン・ジャーナル』紙における言説の相似を先に見たが、実はこの10年のあいだにはある変化を観察することができる。二つのジャーナルでフィールディングは賞賛する慈善施設をそれぞれ列挙しているが、どちらにも名前があがっているのは捨て子養育院だけである。『チャンピオン』紙では名前をあげた三つの施設のうち、捨て子養育院以外の二つはセント・ジョージ病院とバース総合病院であった。これらはともに一般の貧民、病人、障がい者のために設立された施設である。一方10年後に『コヴェント・ガーデン・ジャーナル』紙で名指している二つの施設は捨て子養育院と、もうひとつはやはり救貧事業のひとつであり1749年に設立された既婚女性のための産院 (the Lying-In Hospital for Married Women)<sup>25</sup>である。フィールディング自身はこの産院のことを、「お産の床にある貧しい女性たちの収容施設」と呼んでいる<sup>26</sup>。先に、フィールディングがロンドン捨て子養育院に寄付をした記録はないと述べ、財政的な余裕のなさを理由の可能性として指摘したが、彼はこの既婚女性のための産院については終身理事 (Perpetual Governor) になっており、この地位につくために30ギニーの寄付

を払っているのだ。この産院に対するフィールディングの関心の向けようはどのように理解できるだろうか。

既婚女性のための産院が設立された1749年に『トム・ジョウンズ』は出版され、またフィールディングはミドルセックス州の治安判事に任命されている。法律家としての仕事を始めて10年近く経過しているが、この間、ジャーナルやパンフレットなどで社会のさまざまな問題を取りあげてきた。『トム・ジョウンズ』出版から数年後に出版された『近年の強盗の増加の原因に関する調査』(*An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers*, 1751) や『貧者に対して有効な規定を定めるための提案』(*Proposal for Making an Effectual Provision for the Poor*, 1753) では、彼が治安判事として接した数々の犯罪の事例から、社会が抱える問題を取りあげ解決策について提言している。これらのパンフレットの中でフィールディングは、貧しさが社会における諸悪につながる可能性が大きいことに着目し、貧者が経済的に自立して生活でき、社会にとって有用な存在となるよう救済することの必要性を強く訴えている。

まず『近年の強盗の増加の原因に関する調査』では「ここ数年のうちに盗賊行為が急増していることは注目すべき悪弊だ」<sup>27</sup>との指摘から始め、奢侈に流れたり過度の飲酒や賭博で身を持ち崩す貧者の不道德な生活のありようを厳しく非難し、しかるべき仕事に就いて地道な生活態度を身に着けるべきだと説いている。貧民の雇用の意義については、法律研究家ジョウゼフ・ショウ (Joseph Shaw, 1671-1733) の次のような意見を引用している。

[貧民を雇用すれば] 貧者の子どもたちが怠惰と物乞いのなかで育ち、その物乞い状態が何世代にも渡って続くといったことをくい止めることになるだろう。これは確かに最も偉大な慈善である。貧乏な生活をしている者に何かをあたえる人は良いことをしているわけだが、その貧乏人を雇い教化して公の役に立つようになさしめる人は、さらに良いことをしているのである。それは一年に何十万ポンドもの利益を国にもたらすからである<sup>28</sup>。

全うな仕事につけるよう支援することは貧者に対する社会の責任であり、そうすることによって子どもらを困窮生活から救うことが可能だとフィールディングは熱弁している。

「社会の責任」は理念に留まるものではない。『近年の強盗の増加の原因に関する調査』でも触れ、続く『貧者に対して有効な規定を定めるための提案』においてさらに具体的に提言しているのは、ワークハウス（County Work-house）の建設である。この構想は貧者を対象としたもので、彼らが物乞いをせずに仕事をして生活の資を得るための技術を身に着ける職業訓練をおこなうことを目的とする。それまで貧者の面倒は教区がみるものとされていたが、教区といった小さい組織体ではなく、規模を広げて州全体をカバーし5,000人以上の貧者を収容するワークハウスを建設することによって、より包括的で効果的な運営が可能になるとしている。まずはミドルセックス州でその先駆けとしてのひな形を作り、将来的には国全体に広げていくという遠大な理想を掲げている。実際の運営方法についても細かい点まで検討している。たとえば管理者の役割が重視され、彼らが果たす義務と責任に対して給与が支払われることにより、管理者のプロ意識が高まることを期待している。宗教教育で神を知ることによって「権威」に服従することを学ぶことの必要性も説いている。夜間は建物に鍵をかけて入所者の外出を禁じるなど、徹底した管理体制を目指すところに、このプロジェクトに対するフィールディングの熱意が理解できる。

前にオールワージのパラダイス・ホールを捨て子養育院になぞらえたが、フィールディングが構想したこのワークハウスもまた、理念上は捨て子養育院と通じるところがある。生産性を欠き社会にとって存在意義が薄い貧者と捨て子——彼らを切り捨てることなく、より良い導きによって社会に役立つ人間に育てようという意図である。捨て子養育院への関わり方は必ずしも積極的には思えなかったフィールディングであるが、このワークハウス建設への熱意こそ、フィールディングなり子ども救済策とみなせるだろう。つまり、大人の生活を正すことが子どもを救うことに通じるという考え方である。たとえば『近年の強盗の増加の原因に関する調査』において飲酒の危険性を説く際にフィールディングは次のように述べている。

そしておそらくこの毒物[ジン酒]の作用はゆっくりとしたものであるの  
で、今の世代の人々の体力、健康、生命力の減退は目に見えるほど明  
らかではないとしても、少しでも子孫に目を向ければこの恐ろしい結  
末は理解力の乏しい者にも明らかであろう。またどんなに公共心の鈍  
い人にも警戒心を与えよう。ジンに酩酊してできた子どもはどのよう  
なであろう。この子どもは子宮においても、母乳によっても、ジンの毒  
性の抽出物で育てられることになる。これらの哀れな子どもが（もし  
無事に大人の年齢に達したとしても）我が国の将来の水兵や歩兵にな  
れるのか。こんな子どもたちの働きによって、平和の報酬すべてが我々  
に与えられ、あらゆる戦争の危険から我々を救ってくれるのか。国王  
エドワードや国王ヘンリー、モールバラ公やカンバーランド公のよう  
な人たちにしても、このような哀れな連中の軍隊で何を達成できると  
いえようか。この酔っぱらった供給者[子宮]は農夫や職人の召使を生み  
出すかわりに、海軍や陸軍へ新兵を供給するかわりに、救貧院や慈善  
施設を一杯に満たし、通りを悪臭と病疫で汚染する恐れがあるだけ  
ではないのか<sup>29</sup>。（下線筆者）

ジンに溺れる貧者の子どもは出生前も後も劣悪な状況にあり、捨て子養育院  
のような施設にたどり着かざるをえない。その流れに警鐘を鳴らす治安判事  
フィールディングである。

フィールディングは既に存在してしまっている捨て子に対しては、人道主  
義的な見地からロンドン捨て子養育院のような保護施設の意義を十分理解し  
評価してはいるが、そもそも捨て子が存在するという現象そのものを問題視  
しているのだ。捨て子養育院に一脈通じるワークハウスを構想して、矯正段  
階にある貧者を隔離し徹底的に職業訓練を施して全うな生活ができるよう導  
く意図は、貧しい母親に手を差し伸べる既婚女性のための産院への積極的な  
関わりとつながるものであろう。フィールディングにとっては、捨て子とい  
う社会の病理が生んだ「結果」に対処することよりも、その原因となった社  
会の病理そのものに対策を講じて、捨て子という「結果」を生み出さないこ  
との必要性がより強く感じられたのではないだろうか<sup>30</sup>。

小説『トム・ジョウンズ』において、捨て子トムの母親と推定されたジェニー・ジョウンズに対しオールワージは言う。「もしおまえが一部の無慈悲な母親たち、貞節を無くしただけでなく人間性まで捨ててしまったような母親たちと同じやりかたで、この哀れな子どもを遺棄していたのなら、私は本当におまえに腹を立てただろう。」(I. vii. 51) この小説のナレーターもまた「多くの女たちが、最初の過ちを正すことができなかったことによって、道を踏みはずし邪悪の極限にまで沈み込んでしまうのだ」(I. ix. 60) と述べている。実際に治安判事として、売春婦を取り締まることに多大な精力を傾けていたフィールディングとしては<sup>31</sup>、捨て子の処遇を考えれば考えるほど、捨て子が生まれることを食い止めることの必要性を感じ、悲惨な状況にある母親を適切に保護することを喫緊の課題と考えたのではないかと推察されるのである。同時代の詩人クリストファー・スマート (Christopher Smart, 1722-1771) がフィールディングを追悼する詩文のなかで、「孤児たちの守り人であり、悔悛した女性に居場所をみつける」<sup>32</sup>と述べているのは、フィールディングの人生に対する的確な賛辞といえるだろう。

『トム・ジョウンズ』においては主人公を捨て子養育院的なパラダイス・ホールの抑圧からいったん解放するが、彼の一定の成長をみた後、その捨て子性を解消してパラダイス・ホールの後継者に任じている。この小説に登場するトム以外の非嫡出子の多くも、結局はのちに母親と父親が結婚することになって、それぞれそれなりの環境のなかでまともな親子関係を成立させることになる。この結末を単なるご都合主義の大団円とみるのも十分可能だが、その背後には、非嫡出子の増加に従い捨て子の数が急増する世相のなか、その流れを食い止め、捨て子が存在しない社会をつくることをめざす治安判事フィールディングの意思が働いており、現実には容易に実現しない捨て子問題解消をフィクショナルな大団円のなかに落とし込んでいるとみることができるのではないだろうか。

## 注

- 1 18世紀なかば、数学者であり聖職者でもあったウィリアム・ブライケンリッジ (William Braikenridge, 1700-1762) がイギリスの人口が減少傾向にあるという論文を発表したことがきっかけとなって、人口論争が続いた (川北稔『民衆の大英帝国：近世イギリス社会とアメリカ移民』、pp.211-214.)。歴史家ポール・ラングフォードによると、1726年から31年にかけての5年間に、1561年以来最大級の人口の落ち込みがみられ、続く1741年から42年にもまた人口後退がみられるが、1745年以降はイギリスの人口に安定した増加傾向がみられるという (Paul Langford, *A Polite and Commercial People: England 1727-1783*, p.146.)。ロンドン捨て子養育院開設後、施設拡充の必要にともないさらなる資金援助を議会に申請する際にも、人口確保がその主張に有効な説得力をもたせたようだ。

1756年に [捨て子養育院の] ガバナーたちはこれほど大きな需要を満たし得るのは議会の支援によるしかないと結論づけた。彼らの請願は七年戦争の勃発、フランス軍の侵攻の恐れと時期が一致した。イングランドは自国を守るために人間を必要としたのだが、議会にはイングランドの人口が必要を満たすだけのものではないと思われた。イングランドの人口は減少しつつあると (もちろんこれは正しくないのだが)、皆が考えていたのだ。ゆえに、将来のために命を救うという事業は大きな魅力となり、議会は捨て子養育院の活動を拡張するための資金を予算計上するようすばやく動いたのであった。(Ruth K. McClure, “Johnson’s Criticism of the Foundling Hospital and Its Consequences,” pp.18-19.)

『トム・ジョウンズ』の作中人物であるウェスタンも、当時進行中のオーストリア継承戦争 (1740-8) で毎日失われる人間を補充する必要について言及している。(Henry Fielding, *The History of Tom Jones, a Foundling*, Book V, Chapter xii, p.267.) これ以降『トム・ジョウンズ』からの引用は原著の巻・章・ページを本文中に略記するものとする。

- 2 Caro Howell, *The Foundling Museum; An Introduction*, p.17. 批評家ロナルド・ポールソンによると、“the Foundling artists” は1747年以降毎年11月5日に集まり、捨て子養育院に展示する絵について話し合ったが、年を経るうちに多くの芸術家たちと彼らのパトロンを加えて拡大したという。(Ronald Paulson, *Hogarth: His Life, Art, and Times*, p.50.)
- 3 ロンドン捨て子養育院の歴史をメインテーマにした研究書は多くはないが、末尾の「参考文献」にあげた Ruth K. McClure の *Coram’s Children: The London Foundling*

*Hospital in the Eighteenth Century* 以外には、以下のようなものが参考になるだろう。

- Alysa Levene, “The Estimation of Mortality at the London Foundling Hospital, 1741-99,” *Population Studies*, Vol.59, No.1 (March 2005), pp.87-97.
- R.B. Outhwaite, “‘Objects of Charity’: Petitions to the London Foundling Hospital, 1768-72,” *Eighteenth-Century Studies*, Vol.32, No.4 (Summer, 1999), pp.497-510.
- Gillian Pugh, *LONDON’S forgotten CHILDREN: THOMAS GORAM AND THE FOUNDLING HOSPITAL* (Gloucestershire, The History Press, 2008)
- 4 Michael McKeon, *The Origins of the English Novel, 1600-1740*, pp.158-159. マッキオンはこの状況を「女性の貞節の規範に対する姿勢の緩み」(a relaxation of attitudes toward the rule of female chastity) に基づく「非嫡出に対する寛容の高まり」(the rising toleration of bastardy) と呼んでいる。
- 5 Lisa Zunshine, “The Spectral Hospital: Eighteenth-Century Philanthropy and the Novel,” pp.13-15.)
- 6 Daniel Defoe, *The Generous Projector, or a Friendly Proposal to Prevent Murder and Other Enormous Abuses, By Erecting an Hospital for Foundlings and Bastard-Children*, pp.9-16. デフォーはこの論説のなかで、邪悪な親から生まれたからといってその子どもが飢えたり殺されたりすることを見過ごすことはできないと力説し、非嫡出子が生まれるのを防ぐ策の一つとして、正式に結婚しているのかどうか疑わしい男女に宿を提供しないようにするといった具体的な提案もしている。
- 7 Ruth K. McClure, “Johnson’s Criticism of the Foundling Hospital and Its Consequences,” p.17.
- 8 Henry Fielding, *The Champion*, p.182.
- 9 Henry Fielding, *The Champion*, p.185.
- 10 Henry Fielding, *The Champion*, p.193.
- 11 Henry Fielding, *The Covent-Garden Journal*, p.229.
- 12 Henry Fielding, *The Covent-Garden Journal*, p.247.
- 13 Henry Fielding, *The Covent-Garden Journal*, p.251.
- 14 たとえば『トム・ジョウンズ』において、ホガースについてはオールワージの妹ブリジェット (I. xi. 66) やパートリッジの妻 (II. iii. 82)、スワッカム (III. vi. 138) の姿を描写する際にホガースの絵に描かれた人物を引き合いに出したり、ヘンデルについてはソファイアを初めて紹介するにあたって、その登場をほめたたえる「翼をもった自然の合唱隊」が、「ヘンデルでさえ凌ぐことはできない甘美な調べを奏でる」(IV.ii. 154) として最上級の指標としている。
- 15 Henry Fielding, *Covent-Garden Journal*, p.247.
- 16 Henry Fielding, *Champion*, p.183.
- 17 Henry Fielding, *Covent-Garden Journal*, p.248.
- 18 Henry Fielding, *Jacobite Journal*, p.328.

- 19 批評家ウルフラム・スミジエン (Wolfram Schmidgen) によると、イギリスでは、両親が正式な結婚をする前に生まれた子どもは、その後両親が正式に結婚をしたとしても非嫡出子とみなされたという。(Wolfram Schmidgen, "Illegitimacy and Social Observation: The Bastard in the Eighteenth-Century Novel," p.138.)
- 20 Ruth McClure, *Coram's Children: The London Foundling Hospital in the Eighteenth Century*, pp.74-75.
- 21 Foundling Hospital, *Regulations for Managing the Hospital for the Maintenance and Education of Exposed and Deserted Young Children. By Order of the Governors of the said Hospital*, p.19.
- 22 Foundling Hospital, *An Account of the Hospital for the Maintenance and Education of Exposed and Deserted Young Children*, pp.81-82.
- 23 Homer Obed Brown, "Tom Jones: The 'Bastard' of History," p.202.
- 24 J. Paul Hunter, *Occasional Form: Henry Fielding and the Chains of Circumstance*, pp.184-85.
- 25 既婚女性のための産院の趣意書には、次のように書かれている。

妊娠後期およびお産の時期に、貧困状態にある家族は皆で彼女たち〔妊婦〕の介護にかかりきりになり、こういった時期にみられるはずの喜びは彼らを取り囲む困窮によって抑えられてしまうのである。またもし彼女たちがこういった介護をされないことになったら、危険はいかに大きいことか。哀れな母親か子ども、あるいはその両方が死んでしまい、真の貧困という災いの沈鬱な実例になってしまうのだ。さらに、貧者たちは国の安寧と幸福にとって必要な道具となることから、母子両方の命に関心がもたれるならば、この慈善事業は推薦の必要もないだろうし、宗教に命じられる相互愛と自然によって喚起される同情心にこれほど満ち溢れた構想が、これまで実行されなかったことがむしろ驚きなのである。(An Account of the Rise and Progress of the Lying-in Hospital for Married Women, p.2.)

- 26 Henry Fielding, *The Covent-Garden Journal*, p.251.
- 27 Henry Fielding, *An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers*, p.75.
- 28 *An Enquiry*, p.101. このショウの引用の出典は以下のとおりである。Joseph Shaw, *Practical Justice of the Peace* (1728), i. 3.
- 29 *An Enquiry*, p.90.
- 30 フィールドینگと仲が良くいろいろな仕事を一緒にやっていた弟のジョン・フィールドینگ (John Fielding, 1721-1780) は兄と同様に治安判事であったが、兄の死後1758年に8歳から12歳までの貧しく捨てられた少女たちのための女子孤児院 (Asylum for Orphan Girls) を設立したことにも注目したい。「見捨てられた少女たちと悔い改めた売春婦たちのための保護施設と矯正院の計画」(A Plan for

a Preservatory and Reformatory, For the Benefit of Deserted Girls, and Penitent Prostitutes, 1758) と題された趣意書のなかで、自分の娘を売春宿に売って、娘の稼ぎを売春宿の主人と分け合うような墮落した母親を例に出し、罪のない少女たちが母親と同じ人生を歩むといった墮落の連鎖をくいとめる必要性を論じ、「原因を取り除けば、結果はなくなる」(p.8) と述べている。

- 31 売春婦に対するフィールディングの態度は二面的であるとしばしば指摘される。批評家バートランド・A・ゴルジャー (Bertrand A. Goldgar) も次のように述べている。「裁判所記録が示すように、フィールディングは彼女自身が作り出したわけではない社会システムの罫にはまった個々の女性の苦境に明らかな理解を示しつつも、さらに大きな社会的観点から考えた場合、[売春婦を] 断罪せざるを得ないのだ。」

(Bertrand A. Goldgar, “Fielding and the Whores of London,” p.272.)

- 32 Christopher Smart, “Epitaph on HENRY FIELDING, Esq.,” *St. James’s Magazine* 2 (July 1763), p.312.

## 参考文献

- 川北稔『民衆の大英帝国：近世イギリス社会とアメリカ移民』岩波書店（岩波現代文庫）、2008年。
- Brown, Homer Obed, “Tom Jones: The ‘Bastard’ of History.” *boundary 2* Vol.7, No.2 (Winter, 1979): pp.201-34.
- Defoe, Danie, *The Generous Projector, or a Friendly Proposal to Prevent Murder and Other Enormous Abuses, By Erecting an Hospital for Foundlings and Bastard-Children.* London: Printed for A. Dodd without Temple-bar, 1731.
- Fielding, Henry. *Contributions to The Champion and Related Writings.* Ed. W.B. Coley. “The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding.” Oxford: Clarendon Press, 2003.
- \_\_\_\_\_. *The Covent-Garden Journal in The Covent-Garden Journal and A Plan of the Universal Register-Office.* Ed. Bertrand A. Goldgar. “The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding.” Middletown, CT: Wesleyan UP, 1988.
- \_\_\_\_\_. *An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers in An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers and Related Writings.* Ed. Malvin R. Zirker. “The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding.” Middletown, CT: Wesleyan UP, 1988.
- \_\_\_\_\_. *The History of Tom Jones, a Foundling.* eds. Martin C. Battestin and Fredson Bowers. “The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding.” Middletown, CT.: Wesleyan

- UP, 1975.
- \_\_\_\_\_. *The Jacobite's Journal and Related Writings*. Ed. W.B. Coley. "The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding." Middletown, CT: Wesleyan UP, 1975.
- \_\_\_\_\_. *A Proposal for Making an Effectual Provision for the Poor in An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers and Related Writings*. Ed. Malvin R. Zirker. "The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding." Middletown, CT: Wesleyan UP, 1988.
- Fielding, John, *A Plan for A Preservatory and Reformatory, For the Benefit of Deserted Girls, and Penitent Prostitutes*, 1758.
- Foundling Hospital, *An Account of the Hospital for the Maintenance and Education of Exposed and Deserted Young Children*. 1749.
- Foundling Hospital, *Regulations for Managing the Hospital for the Maintenance and Education of Exposed and Deserted Young Children. By Order of the Governors of the said Hospital*, London, 1757.
- Goldgar, Bertrand A. "Fielding and the Whores of London." *Philological Quarterly*, Vol.64, No.2, (1985): pp.265-273.
- Howell, Caro. *The Foundling Museum; An Introduction*. London: The Foundling Museum, 2014.
- Hunter, J. Paul. *Occasional Form: Henry Fielding and the Chains of Circumstance*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1975.
- Langford, Paul. *A Polite and Commercial People: England 1727-1783*. Oxford: Clarendon Press, 1989.
- Lying-In Hospital for Married Women. *An Account of the Rise and Progress of the Lying-in Hospital for Married Women, in Brownlow-Street, Long-Acre, from its first institution in November 1749, to July 25, 1751*. 1751.
- McClure, Ruth K. *Coram's Children: The London Foundling Hospital in the Eighteenth Century*. New Haven: Yale University Press, 1981.
- \_\_\_\_\_. "Johnson's Criticism of the Foundling Hospital and Its Consequences." *The Review of English Studies, New Series*, Vol.27, No.105 (Feb., 1976): pp.17-26.
- McKeon, Michael. *The Origins of the English Novel, 1600-1740*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1991.
- Paulson, Ronald. *Hogarth: His Life, Art, and Times*. New Haven: Yale UP, 1971, Vol.2.
- Smart, Christopher. "Epitaph on HENRY FIELDING, Esq." in Robert Lloyd, *St. James's Magazine*, Vol.2 (July 1763), p.312.
- Schmidgen, Wolfram. "Illegitimacy and Social Observation: The Bastard in the Eighteenth-Century Novel" *ELH*, Vol.69, No.1 (Spring, 2002): pp.133-166.
- Zunshine, Lisa. "The Spectral Hospital: Eighteenth-Century Philanthropy and the Novel."



Abstract

## The Abandoned Child in *Tom Jones*: Fielding's Attitude toward the London Foundling Hospital

Yuko ENGETSU

The establishment of the London Foundling Hospital in 1739 reflects a rapid increase in the number of abandoned children in eighteenth-century Britain. It is worth noting that many novels written in this age had foundlings or illegitimate children as characters. How did Henry Fielding, as the author of the novel, *The History of Tom Jones, a Foundling*, as well as a journalist and later a magistrate, see child abandonment and the London Foundling Hospital?

In his writings as a journalist, Fielding expressed appreciation for the role played by the London Foundling Hospital. However, Fielding took a cautious attitude toward charitable organizations, worrying about the possibility that they could be improperly managed. For example, while Paradise Hall in *Tom Jones* can be likened to the Foundling Hospital as a place where abandoned children are cared for and protected, it turns out to not be a true “paradise,” but rather a place where the protagonist, Tom, is exposed to severe repression and is ousted at last.

Furthermore, seeing various criminal cases as a magistrate, Fielding came to consider poverty to be the root of most evils in society. He strongly felt the necessity of helping the poor to become financially independent and useful to society, and although he recognized the importance of protecting abandoned children, his first concern is rather to correct the life of poor adults in order to prevent them from abandoning their children in the first place.

Fielding's desire to prevent children from being abandoned may be reflected in *Tom Jones*. At the end of the novel, it suddenly turns out that Tom

is not from obscure origins but is a nephew of Allworthy, the present head of Paradise Hall. With the facts of his parentage rewritten, Tom Jones is qualified to be the authorized successor of Paradise Hall.

**Keywords:** Henry Fielding, *Tom Jones*, London Foundling Hospital, charity